

ソチ・パラリンピック視察全体概要

1. 街の受け入れ態勢、ボランティアに関して

日本からモスクワ乗り継ぎで約 12 時間、イスタンブール経由で約 14 時間の行程ののち、空港に到着したのは深夜であった。深夜にもかかわらず、パラリンピックの期間もボランティアのいるインフォメーションは 24 時間対応しているようで、ボランティアスタッフがタクシー交渉の手助けをしてくれた。というのも、現地の人にはほとんど英語が通じず、英語のわかるボランティアも限られていた。土地勘もなく、言葉も通じないとなれば、メーターのついていないタクシーを利用するのは、慣れるまで難しいと思った。

オリンピック・パラリンピックの期間中、一般の観客が会場に入るには **Spectator Pass** が必要であった。これは事前にインターネットから登録して、現地の専用窓口で手に入れる必要があるのだが、開会式の日には発行センターが大変な混雑で 2 時間待ちくらいの行列ができていた。というのも、なにごとにも非常に非効率で作業に時間がかかり、秩序もなかった。スペクテーターパスの発行、バスの乗り降り、ボランティアの案内も要領を得ているとはいいがたかった。このパスがあればソチから各オリンピック会場(山会場 **Mountain cluster** と海会場 **Coastal cluster**)まではオリンピックバス、電車ともに無料で利用できた。

オリンピックバスは 24 時間走っていて、発着の場所によってコースが番号で示され、案内図も各バス停に掲示されていた。日中は 5~15 分間隔で運転されており、英語の表記やアナウンスもあり便利であった。オリンピック・パラリンピックのために作られたらしい電車は広々としたつくりできれいであったが、運転間隔が広いのと速度が遅く、バスに抜かれるくらいであった。観客のためのパンフレットに示された時間表の所要時間はあまりあてにならなかった。電車のセキュリティが非常に厳しく、液体や食べ物の持ち込みは禁止で、ボディチェックがあった。それに比較してバスは何のチェックもなく、この対比が不思議であった。バスに至ってはバスのチェックもしていなかった。東京での交通機関の利用については、このようなシステムをとるとしたら混乱するので、都市での開催にはロンドン型になるであろう。チケットにその日のフリーパスがついていて、プリペイドカードのようにして使う形である。

セキュリティのためとはいえ、顔写真入りのパスを現地で発行するという方法は、時間がかかり無駄が多かった。パラリンピックでこの状態なら、オリンピックの時はずっとひどかったのではないだろうかと思えた。日本では係員が教育されるであろうし、勤勉な国民性からいってもこのようなことにはならないであろうが、とにかく世界中の人が集うのだから大変なことだ。スムーズで安全に配慮したシステムを考える必要がある。このようなところにもビジネスチャンスはあるし、「おもてなしの心」はこういうところで発揮されるべきであろう。

2. 競技会場、観客の様子

オリンピックパークは海岸沿いであって **Coastal cluster** と呼ばれ、オリンピックの時はゲートを入るとすぐに各国の展示会場が開設されていたようだが、パラリンピックの今回の視察時には日本をはじめすべてが閉館しており、ロシアの文化展示と平昌（韓国）、公認グッズの売り場が残っていたのみであった。ロシアの文化展示は、広い国土の多様な文化の紹介として各地域の名産品などが展示され、アクティビティも用意されていて見応えがあった。東京での開催時にも、日本全体の紹介をこのような文化的な形で行うのはとてもいいことであろう。その内容や場所など、これから準備が必要である。

パークの中央まで行くと、スケート各種（スピードスケート、フィギュアスケート、アイスホッケー、ショートトラック、カーリング）の会場が円形に配置され、その中央に聖火台のある広場があった。いずれも巨大で立派な施設であった。開会式の後、かなりの大勢の人間が移動したが、交通機関の誘導など混乱もなく、スムーズであった。広大な敷地を移動するためにかかる時間が、混雑緩和のために役に立った印象であった。

Mountain cluster は電車かバスでパークからは 1 時間程度のところにあり、かなり広大なスキーリゾートであった。山会場の中でも各会場がかなり離れており、バスやケーブルでの移動が必要であった。それぞれの降り場から会場までもかなり歩き、階段や坂も多くお年寄りには厳しい立地であった。障害のある人たちはおそらく車で移動していて、同じ応援スタンドには車いす専用の席が一番前（下）にあった。アルペン競技を観戦中にプーチン大統領が物々しい黒塗りの車で現れた。コーカサスの山々が一望でき、景色は素晴らしかった。また、天気の良い日中は基本的に平地と変わらない気温でとても暖かく、観戦にはもってこいであったが、雪質はよくはなかったであろう。**Mountain cluster** の Hub となる鉄道駅周辺には、既存のリゾート地があり、レストランや土産物、ホテルなど立派な街並みであった。日本でもスキー場は物価が高いが、ここも同様であった。各会場の道案内は英語の表記もあったが、広大な会場の案内は十分とは言えず、ボランティアに聞いてもあまり要領を得ないことが多く、かなり振り回された。もう少しわかりやすい道案内、交通案内とボランティアの語学とともに会場案内の教育が必要だと思った。

3. 開会式と競技を観戦して

3 月 7 日、開会式を会場で見ることができた。大勢のパフォーマーによるマスゲームは見応えがあったし、映像や大がかりな仕掛けも素晴らしかった。花火を室内で使っても、まったく煙くないしにおいもないのが不思議であった。聖火台は会場の外にあって開会式に参加している人には見えないのだが、開会式の最後に花火が上がってもすごい音ではあった。ウクライ

ナ情勢が微妙な時期であったため、ウクライナ選手団は開会式には国旗を持った旗手のみが参加して、選手団は選手席に座っていた。会場からは温かい拍手が送られ、旗手が選手席に戻ると席に待機していた選手たちが次々とねぎらっている様子が見えた。パフォーマンスに車いすなどの障害のある人が多数参加しているのも印象的であった。組織委員会会長、IPC 会長のあいさつも非常に良い内容であった。

パラリンピックについては障害者のスポーツはやはり、その国の障害者スポーツへの理解が反映される。また、先進国の方がその理解や手当は進んでいることであろう。健常者のスポーツよりも用具や器具にお金がかかり、それが競技の結果に大きく影響するスポーツが多いからだ。開会式でも参加者が多かったのは、カナダ、アメリカ、ドイツ、開催国ロシア、そして日本といった先進国と、スウェーデン、デンマークといった冬のスポーツの盛んな北欧の国々、次回開催の韓国などであった。

競技はアルペンスキーとスキー・クロスカントリーを観戦した。いずれも山の会場であったが、2 つの会場は異なる山にあってかなり距離は離れていた。競技は障害のクラスごとに行われ、スタンドは満席であった。ロシアの選手が活躍する競技では、スタンドから「ロシア、ロシア」の掛け声がかかったし、コースアウトしたり、遅れてしまった選手には暖かい拍手や声援が送られていた。日本から応援に駆け付けた観客は主に家族や会社の関係者と思われ、その数は少なかった。ロシアの観客は一般の人も多く見受けられ、天気の良い日ではあったがかなりの観客数であった。アルペンスキーはゴール前最後の壁で転倒する選手が多く、非常に難しいコースであったようだ。その中で座位のクラスで、日本選手が金銀メダルを独占した。個人差のタイム差が健常者のスポーツよりもかなり大きく、優勝した狩野選手は抜群の安定感で断トツの 1 位であった。クロスカントリーでは、視察に参加した大塚特別支援学校の根本先生が、教員を通してかかわりのある新田選手の応援旗を作り、生徒たちが寄せ書きをしたものを持参した。旗を振って応援することができ、新田選手の検討が素晴らしかった。また、両種目ともに視覚障害のクラスが印象的であった。いずれもガイドスキーヤーが先導して選手に支持をだしていたが、フラワーセレモニーではガイドスキーヤーも一緒に表彰台に上り健闘を称えられていた。

4. 2020 東京に向けての課題

2020 年東京でのオリンピック・パラリンピック開催に向けて、課題の一つに障害者スポーツへの理解とサポート体制の整備があげられる。今後 6 年で障害者のスポーツへの理解を深め、どのようにサポートするのかインフラ整備とともに人々の内面での発展が必要ではないかと思う。中高生の教育、社会への啓蒙活動など今後の課題であろう。ロシアではこれまで、それほど障害者スポーツへの理解や社会的なバックアップが進んでいたとは思えない。パラリンピックの開

催によって、障害者のことを考えたインフラが整備されたり、障害者スポーツへの理解が深まったりすればよいと思う。これこそがレガシーである。2020 年東京での開催に向けて教育の果たす役割は大きい。

文責:宮崎明世(筑波大学)